Modality of Inversion Exclamatives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3943

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

倒置感嘆文のモダリティ

河　野　　武

0．序論

英語の感嘆文の一種に，yes-no 疑問文と同様の倒置を伴う次のような形式がある。以下，この種の感嘆文を「倒置感嘆文」と呼ぶ（McCawley 1973, Michaelis and Lambrecht 1996）[1]。

(1) Has she grown!
(2) Hasn't she grown!

(1)・(2)はそれぞれ統語形式上は肯定的及び否定的感嘆文であるが，共に 'She has grown very much' のような命題内容を表し，次のような wh- 感嘆文に対応する（Quirk et al. 1985: 825）。

(3) How much she has grown!

一方で，倒置感嘆文は，話し手が強い感情を抱いている事柄について聞き手の同意を求める機能をもっており，この点で次のような下降調のイントネーションを帯びる付加疑問文と類似した性質をもつとされる（Quirk et al. 1985: 825, Wierzbicka 1991: 46）。

(4) She has grown much, hasn't she?

本論では，第一に，McCawley（1973）の主張とは反対に，倒置感嘆文は疑問文と相通する特性をもつ面があることを述べる。第二に，(1)のような肯定倒置感嘆文と(2)のような否定倒置感嘆文の住み分けについて論ずる。第三に，倒置感嘆文と付加疑問文との対応関係を検討する。第四に，付加語句を伴う感嘆文（「付加感嘆文」）にも分析を広げる。全体的に，倒置感嘆文

のモダリティを語用論的に規定することを目指す。

1．倒置感嘆文と疑問文との関連性

McCawley（1973）は，草分け的な論考の中で，倒置感嘆文が疑問文とは異なった統語特徴をもつことを記述している。その中で，特に注目したいのは次の相違点である。

i）下降調のイントネーション

ii）間投詞との共起

(5) a. *Boy, is syntax easy?（Rise）

b. Boy, is syntax easy!（Fall）

(5a)のような疑問文はある種の間投詞と相容れないが，(5b)のような倒置感嘆文は随意的にではあるが間投詞と共起しうる。なお，(5a)・(5b)のイントネーション型については，それぞれの発話に典型的な使用が想定されているだけである[2]。

iii）delicious 等の特定の語彙項目との共起

(6) a. *Is this cookie delicious?

b. Is this cookie delicious!

経験者のみが判断しうる，主観性が高い感覚内容を表す語は，疑問文には生起しにくいが，感嘆文には生起しうる。

iv）強意副詞との共起

(7) a. Is syntax ø/very/quite/extremely/that easy?

b. Is syntax ø/*very/*quite/*extremely/*that easy!

強意副詞は疑問文には自由に起こりうるが，感嘆文には起こりえない。

v）二種類の ever との共起

(8) a. Is syntax ever easy?（$ever_1$=at any time）

b. Is syntax ever easy! (ever$_2$=really and truly)

疑問文には ever$_1$ は現れうるが ever$_2$ は現れえない。逆に，感嘆文には ever$_2$ は現れうるが ever$_1$ は現れえない。

vi) 否定辞との共起

(9) a. Isn't syntax easy?

b. *Boy, isn't syntax easy! (=Syntax isn't easy at all.)

(9a)のような否定疑問文は許容されるが，(9b)のような否定感嘆文は括弧内に示したような否定命題を表す文としては許容されない。なお，否定疑問文についても否定命題を埋め込むことは排除されなければならないが，そのことへの言及は McCawley にはない。

さて，上に挙げた項目 i) ～ iv) は倒置感嘆文と疑問文を区別する特性としてひとまず受け入れるとして，v) と vi) については今少し検討の余地があると思われる。まず，倒置感嘆文に現れる ever$_2$ についてである。次の例を比較してみたい[3]。

(10) a. Am I ever happy!

b. *I'm ever happy!

(10a)のような倒置感嘆文においては ever$_2$ は自然に用いられるが，(10b)のような平叙文をベースにした感嘆文では調和しない。もちろん，ever$_2$ は so を限定する語として次のような平叙文には現れうるが，それとは事情は異なると見るべきである。

(11) He looks ever so smart.

また，(10a)に対応する否定倒置感嘆文は次のように容認されないが，これには別の要因が働いていると考えられるので，今は触れないでおく。

(12) *Aren't I ever happy!

さて，感嘆の発語内行為（すなわち主観的な感情表出）を共有する(10a)と(10b)の間で，(10a)にのみ $ever_2$ が現れうるとすれば，(10a)には $ever_2$ を認可する統語的特性が内在しているとしなければならない。ここに関与しているのは「疑問」の要素であろう。(10a)の $ever_2$ は $ever_1$ と同様に否定極性項目であり，否定や疑問などの「対比想定をもつ文脈，すなわち否定の認知構造」(吉村 1998）でのみ認可されるものと思われる。このことは，倒置感嘆文が疑問文を基底にもつ感嘆文であるとみなすことによって自然に説明される。もちろん，ここでの疑問は，通常の yes-no 疑問文のように命題（that I'm (so) happy）の真偽性判断を聞き手に問うものではない[4]。ここでは，むしろ，命題の真偽性は問うまでもなく明らかなことを伝えるための，本来話し手自身に向けられた質問である。基底の疑問文のより詳細な規定は後に廻すとして，ここでは $ever_2$ が疑問の要素によって認可される事実を指摘するにとどめておきたい。

次に，上記の項目 vi）否定辞との共起に関する McCawley の指摘の問題点を検討してみたい。まず，否定疑問文と否定倒置感嘆文を公平に対比するためには(9b)は次のように改めなければならない。

(13) Isn't syntax easy!

(13)はもちろん問題のない発話である。(9b)が容認されないのは，そもそも Boy 等の間投詞とうまく馴染まないからである。この点で肯定倒置感嘆文とは異なった振る舞いを見せるが，その理由については後で取り上げる。

さらに，(13)は確かに 'Syntax isn't easy at all' のような命題を表さず，むしろ肯定倒置感嘆文である Is syntax easy! と同様に，'Syntax is (so) easy' のような肯定的な命題を表す。倒置感嘆文の肯定・否定の違いは命題内容への話し手の態度，すなわちモダリティに関わるものである。すぐに気づくように，肯定・否定がモダリティに貢献するのは疑問文の場合でも同じである。

(14) a. Is syntax easy?
b. Isn't syntax easy?

肯定疑問文(14a)には，yes/no いずれかの答えを相手から引き出そうとする「誘発的態度」(conducive attitude) は特に伴わないが，(14b)には明らかに yes の答えにバイアスをかけた誘発的態度が介在する。このような次第で，本当に注目すべきなのは，McCawley が証拠づけようとした疑問文と倒置感嘆文の相違なのではなく，むしろ並行性なのである。

2．肯定倒置感嘆文と否定倒置感嘆文の差異

肯定倒置感嘆文と否定倒置感嘆文の特性の違いを探るために，まず次の例を取ってみよう。

(15) a. Is he mad!
b. Isn't he mad!

前節で素描した見方に沿って，倒置感嘆文は基底に話し手自身に宛てた問いをもつとしよう。さらに，その問いに対する話し手自身の答えが含意されているとしよう。こうして，上の一対の倒置感嘆文は次のように定式化される。

(16) a. i) Self-addressed question: <Is it the case that he is (so) mad?>
ii) Self-elicited answer: <Of course, it is.>
b. i) Self-addressed question: <Isn't it the case that he is (so) mad?>
ii) Self-elicited answer: <Of course, it is.>

自問部分については，肯定的な答えを引き出そうとする誘発的態度が伴うか否かで否定倒置感嘆文(16b)と肯定倒置感嘆文(16a)の差が生ずる。しかし，自答部分は共に命題内容を肯定するものであり，差はない。要するに，異なるモードであえて自分自身に問いかける風を装い，結局は答えは問うまでもなく明らかなことを強意的に提示する発話の方略であるといえる。なお，誘発的態度は話し手の自問自答のなかで作用するものではあるが，誘発的質問の論拠となるべき，聞き手との何らかの共有化された（ないしは共有化されているとみなしうる）想定を必要とする。従って，例えば(15b)では命題内容の 'that he is (so) mad' が相手と文脈的に共有されていることが重要であ

る。一方,(15a)では命題内容は聞き手にとって唐突で新奇なものであってもさしつかえない。

肯定倒置感嘆文と否定倒置感嘆文の別の例をさらに観察してみたい。

(17) a. Am I happy!
b. *Aren't I happy!
(18) a. *Are you happy!
b. Aren't you happy!
(19) a. Are we happy!
b. ?Aren't we happy!
(20) a. Is it a beautiful day today!
b. Isn't it a beautiful day today!

これから見て取れるように，外界の事象の認識を内容とする(20)では倒置感嘆文は肯定でも否定でも許容される。ここでの認識は，場面を共有することで，既に共有されているか確実に共有可能であると判断されるからである。対照的に，happy のような経験者のみによってしか認識できない心理状態を表す発話においては，倒置感嘆文は肯定・否定で異なる分布を示す。話し手が経験者となる(17)の場合では，肯定形は許されるが否定形は許されない。肯定形は話し手の感情を吐露するのに適しているし，否定形は相手が定かには知りようのない自分の感情を既に共有されたものとして扱おうとしている点で矛盾が生じている。聞き手が経験者となる(18)の場合では，話し手は相手の感情に直接アクセスできないので，そもそも感嘆文は不可能なように思われる[5]。しかし，実際は，確かに肯定形は排除されるが，否定形はアイロニー等では許容される。話し手と聞き手が経験者となる（いわゆる包括的 we)(19)の場合では，肯定形は話し手が主体の(17a)と並行的な特性を示し，否定形は聞き手が主体の(18b)と同様のパターンを示す。(但し，否定形が少し不自然になっているが，その理由は目下不明である。)

倒置感嘆文の主体が二人称であっても，第三者によって観察可能な事態を述べる場合には容認可能性は高まる。次の例を参照されたい。

(21) a. Are you lucky!

b. ?Aren't you lucky!

Lucky は広く記述的な述語であり，聞き手に関わる事態を話し手が共感的に記述する発話として何ら問題はない。(但し，(21b)が完全に容認可能でない理由はさらに究明しなければならない。)

3．倒置感嘆文と付加疑問文の対応

すでに触れたように，倒置感嘆文は付加疑問文と類似した性質をもつとされているが，厳密にどのように対応するかについてはまだ明らかにされていない。そこで，本節では両者の対応関係について検討してみたい。

倒置感嘆文の特性のうち，基底の質問のモダリティについては前節で述べたが，もう一つの特性である感嘆のモダリティについて述べておかなければならない。次の例を観察したい。

(22) God, am I late!

Michaelis and Lambrecht (1996) に依れば，この種の倒置感嘆文は他の様々な形式の感嘆文と共通に，i) Presupposed Open Proposition，ii) Scalar Extent，iii) Assertion of Affective Stance: Expectation Contravention によって特徴づけられる。i) は前提の開命題であり，(22)に即して言えば 'I am late to X extent' のような内容を表す。ii) の尺度の範囲は，特定の個を（やや漠然とではあるが，文脈的に推論可能な）尺度上の特定の点に位置づけることである。iii) は期待が裏切られたことについての話し手の感情的スタンスの主張を指し，問題となる尺度の値が予想外に高いこと，(22)では自分が予想外の遅れを招いてしまったことを表す。間投詞の God は感情的スタンスの指標である。以上が倒置感嘆文の感嘆のモダリティである。Michaelis and Lambrecht (1996) は否定倒置感嘆文を取り上げていないが，本論では感嘆のモダリティに関する限り倒置感嘆文は肯定形・否定形による差はないとみなす。

付加疑問文には，次の(23)のような逆極付加疑問文 (RPT) と，(24)のような同極付加疑問文 (SPT) がある。

(23) a. She is naive, isn't she?

b. She isn't naive, is she?

(24) a. She is naive, is she?

b. She isn't naive, isn't she?

これらの付加疑問文と共起する主節は，RPTの場合には，おおむね「命題pが真である（と話し手が信ずる）」ことを表し（Hudson 1975; Quirk et al. 1985），SPTの場合には，相手の発話の反復（Cattell 1973），話し手による状況の解釈的想定の表示（Wierzbicka 1991），アイロニー（Hudson 1975; Quirk et al. 1985）等を表すとされる。しかし，もう少し注意深く観察すると，RPTの主節は話し手の判断が聞き手を主導する情報提示の形を取り，SPTの主節は相手の発話や考えの解釈的表示を内容とする，話し手の判断が聞き手に従属する情報提示の形を取ることが見てとれる（河野 2001）。

一方，付加語句の表す内容は，RPT・SPT共に同意・確認を求める誘発的質問にあるとする見方や（Hudson 1975; McGregor 1995），RPTは誘発的質問を表すがSPTは「感嘆」(Lyons 1977)，「皮肉を込めた疑い」(Quirk et al. 1985)，「主張部分の含意の強意化」(Bolinger 1989)とする特徴付けがある[6]。本論では，これらの付加疑問文は，基底の〈質問〉を残しつつ，特殊化された発話モダリティを表すと考える。ここに関わるのは，「関連性判断」・「関連性意識の判断」である（河野 1994，1995，1996a，1996b，2001）[7]。関連性判断は，発話が当の文脈で関連性があるか否か（もっとくだいて言えば，情報価値が高く的確か否か）の判断に関わり，(話し手の)〈主張〉と（聞き手への）〈質問〉のモードをもつ。関連性意識の判断は，発話が関連性をもつことに相手が気付いているか否かの判断に関わり，同じく〈主張〉と〈質問〉のモードをもつ。これらの判断のモードの違いはイントネーションに反映し，〈主張〉は下降調で〈質問〉は上昇調で表示される。また，付加疑問文は話し手と聞き手の認知的な共通基盤を築くねらいをもっているので，関連性モダリティはとりわけ「話し手・聞き手の双方にとっての関連性」に関わるものとなる。

以上の倒置感嘆文および付加疑問文の特性を踏まえて，以下に両者を具体的に対比してみたい。先に観察した倒置感嘆文(17)～(20)に対応する次の付加疑問文の例を見られたい。

(25) a. *I'm so happy, aren't I?
b. ??I'm so happy, am I?
(26) a. ?You're so happy, aren't you?
b. You're so happy, are you?
(27) a. ??We're so happy, aren't we?
b. ?We're so happy, are we?
(28) a. It's a beautiful day today, isn't it?
b. It's a beautiful day today, is it?

倒置感嘆文との対比から次のようなことが浮き彫りになる。まず,(20)と同様に，外界の事象の認識を表す(28)は自然な発話を形成する。一方，主体の心的状態を表す(25)～(27)は(17)～(19)と同様に容認可能性が変異する。次に，倒置感嘆文の肯定形・否定形と付加疑問文 RPT・SPT を相互に突き合わせてみると,否定倒置感嘆文と RPT が相関の度合いがかなり高いと言える。この部分が倒置感嘆文と付加疑問文の機能的な類似性と言われてきたものに当たると思われる。肯定倒置感嘆文と SPT との相関は認めにくく,むしろそれぞれ独自の発話機能を備えていることを示唆するものである。

否定倒置感嘆文と RPT が機能的に重なるのは,共に話し手と聞き手との共有化された（ないしは共有化しているとみなしうる）想定を必要とするからである。RPT は，話し手によって共有化されていると判断される想定を実際に相手がもっているかどうかを直接的・明示的に確認するものである。対照的に，否定倒置感嘆文は話し手のあえて掲げた自問に肯定的な答えを提示すべく誘発的態度を伴って基底の質問を行っているが，この誘発的質問を正当化するための，聞き手との何らかの共有化された想定を必要とする。感嘆文は話し手の一方的な感情表出であり，発話の構えは大幅に話し手の裁量に任せられているとはいえ，自ら肯定的な答えにバイアスをかけるにはただ自分にそう思われるからというのでは説得力があるとは言えず，相手の同意も期待できなくてはならないであろう。ここでは，共有化された想定は間接的に作用する。

肯定倒置感嘆文と SPT との乖離は,それぞれの発話機能を振り返ってみれば当然といえる。肯定倒置感嘆文は,(感嘆文を解釈するための文脈的想定はむろん必要であるが）否定倒置感嘆文のような基底の質問に関わる特定の共

有的想定は特に介在せず，発話に当たって聞き手の関与する度合いが低く，逆に話し手の自発性・独立性が高い。ここでは，基本的に，聞き手は話し手の感嘆の発話をもっぱら鑑賞するだけである。これに対して，既に述べたように，SPT は，第一義的に，付加疑問文に普遍的な，共有的想定についての聞き手への確認の質問を表すものである。さらに,既に明らかにしたように，RPTの主節は話し手の判断が聞き手を主導する情報提示の形を取るのと対照的に，SPT の主節は相手の発話や考えの解釈的表示を内容とする，話し手の判断が聞き手に従属する情報提示の形を取る。SPT は，典型的に，相手に帰属する発話や考えに接した結果共有化されるに至った想定について相手に確認を求める発話形式であり，相手への依存度が高いと言える。このように，話し手の自由で自発的な感情表出か，それとも聞き手の認知状態に依存的な確認の発話かの違いが肯定倒置感嘆文と SPT とをかなり鮮明に分けているとみなせる。

4．付加感嘆文

感嘆文は，付加疑問に比肩する付加語句を伴うことがある。これを便宜的に「付加感嘆文」と呼ぶことにする。次の例を見てみたい。

(29) a. What a disaster it was, wasn't it!
b. ?What a disaster it was, was it!

Huddleston and Pullum（2002: 922）に依れば，一般的に感嘆文は陳述部分（すなわち事態の記述）と感嘆部分（すなわち事態への話し手の強い感情的反応ないしは態度の表明）から成り，感嘆部分は前景に，陳述部分は後景に位置づけられるという。さらに，(29a)のような RPT を伴う場合には，(陳述部分のみならず）話し手の主観的態度（つまり事態への驚き）への聞き手の同意を求める形を取り，自然な発話になるという。一方，(29b)のような constant polarity tag（すなわち，本論の SPT）の場合は，陳述部分への聞き手の同意を求める形となり，本来後景となるべきステイタスに矛盾が生ずるため，不適格になるとされる。

本論では，既に述べた特徴付けに沿って，Huddleston and Pullum とは異なる分析を提案したい。まず，付加感嘆文は，主節の感嘆文と付加語句から

成り，付加語句は基底の反復的な感嘆文がモダリティ化したものとみなしたい[8]。この基底の反復的感嘆文は，既におなじみの否定・肯定感嘆文である。

(29') a. Wasn't it a disaster!
b. Was it a disaster!

Disaster は内在的に感情的なコノテーションを伴う語であるが，さらに話し手の主観的な段階付けを許す名詞である。いずれにせよ，(29'a)・(29'b)は，他の否定・肯定感嘆文と共通に，(16)で規定した特性をもつ。すなわち，両者共に，驚くべき事態を噛みしめるための自問自答の中で，肯定的な答え（Of course, it was）を提出する構えを表している。ただ，基底の質問は，否定感嘆文では聞き手との共有的想定を期待した（自分宛の）誘発的質問となるが，肯定感嘆文では特に誘発的態度を伴わない単純な（自分宛の）質問となる。このように，付加感嘆文においては，微妙なニュアンスの違いを見せる発話態度が付加語句に結晶化して，主節の感嘆文では表現しきれない表情の彩を添えているものと解釈できる。

5．結論

本論では，倒置感嘆文のモダリティを基底の質問のモダリティと発語内行為としての感嘆のモダリティの両面から接近した。肯定倒置感嘆文と否定倒置感嘆文は，質問のモダリティにおいて誘発的態度を伴うか否かで差異化されることを見た。さらに，倒置感嘆文と付加疑問文との対応関係は，否定倒置感嘆文と RPT との間で濃密であり，肯定倒置感嘆文と SPT との間では希薄であることを検証した。また，付加感嘆文における付加語句は，エコー的な倒置感嘆文に由来するモダリティ標識であることを示した。

注

1　倒置感嘆文は包括的な発話機能としては感嘆文であることは疑いないが，基底の発話が反映されている統語形式に注目すると疑問文の一種とも見なしうるので，「感嘆疑問文」(exclamatory question)（Quirk et al. 1985）のような命名もありうる。

2 Bolinger（1989: 257-259）は，イントネーションが倒置感嘆文と疑問文とを区別する決定的な役割をもっていないことを指摘している。例えば，上昇調でも，比較的低いピッチから高い終末ピッチへの上昇は倒置感嘆文には起こりにくいが，中高ピッチから狭い声域での上昇は普通であるという。また，次のようなエコー疑問文の場合には，むしろ高い上昇調が自然であるという。

Was she mad? — Was she mad? Boy! You've never seen anything like it. (p. 258)

3 次の例文の容認可能性の判断は Ronald Thornton 氏に依る。以下，同氏の判断による例文は例文番号を太字で示す。

4 Wierzbicka（1991: 46）は，否定倒置感嘆文は必ずしも常に相手からの確認を求める訳ではなく，しばしば話し手の感情表出のためだけに用いられるとして，感嘆文に続けて話し手の肯定的陳述が現れる次のような例を挙げている。

Wasn't that funny? That was the funniest thing I've ever heard. (Buzo 1974: 114, cited in Wierzbicka 1991: 46)

5 神尾（1990）に依れば，(18)のような二人称主語（及び三人称主語）をもつ「心理文」は，「これらの文が表す情報が話し手にとって〈近〉情報である場合，すなわち話し手の情報のなわ張りに属する場合に限られる」(p. 125) とされる。

6 Kimps (2007) は SPT の意味及び機能を 'evidential modification' と 'conduciveness: control power/turn-allocation' に置いている。前者は命題への話し手の関わり方に関与し，後者は聞き手との対人関係的な関わり方に関与するものである。しかしながら，この意味・機能は SPT に固有のものではなく，むしろ付加疑問文に一般的な属性であると見なすべきである。

7 「関連性判断」・「関連性意識の判断」に関わる「関連性」の概念については Sperber and Wilson（1986）を参照。

8 付加感嘆文に伴う付加語句は，次のような相手の感嘆文への同意を表す発話に現れる付加語句とも通底するするものであると考えられる。

How she hated it! — Yes, didn't she! (Huddleston and Pullum 2002: 922)

ここで，同意の感嘆文は肯定形ではなく，否定形になっていることに注意する必要がある。言うまでもなく，相手の発話に帰される（共有的）想定に裏打ちされているからである。

参考文献

Bolinger, D. 1989. Intonation and its uses. Stanford: Stanford University Press.

Cattell, R. 1973. Negative transportation and tag questions. Language 49, 612-639.

Huddleston, R. and G.K. Pullum. 2002. The Cambridge grammar of the English language. Cambridge: Cambridge University Press.

Hudson, R. A. 1975. The meaning of questions. Language 51, 1-37.
神尾昭雄 1990.『情報のなわ張り理論』東京：大修館。
Kimps, D. 2007. Declarative constant polarity tag questions: a data-driven analysis of their form, meaning and attitudinal uses. Journal of Pragmatics 39, 270-291.
河野 武 1994.「『関連性』とイントネーション」,『大妻レヴュー』第 27 号，75-89。
河野 武 1995.「『関連性』とモダリティ」,『大妻レヴュー』第 28 号，75-89。
河野 武 1996a.「Bolinger の Profile 理論の再分析」,『大妻女子大学紀要（文系）』第 28 号，75-89。
河野 武 1996b.「イントネーションの関連性モダリティ理論」,『音韻研究』,37-40。東京：開拓社。
河野 武 2001.「付加疑問文の関連性モダリティ」,『大妻女子大学（文系）』第 33 号，75-89。
Lyons, J. 1977. Semantics. Cambridge: Cambridge University Press.
McCawley, N. A. 1973. Boy! Is syntax easy! In Corum, C., T. C. Smith-Stark, and A. Weiser, eds., Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 369-377.
McGregor, W. 1995. The English 'tag question': a new analysis, is(n't) it? In Hasan, R. and P. Fries, eds., On subject and theme: a discourse functional perspective, 91-121. Amsterdam: John Benjamins.
Michaelis, L. A. and K. Lambrecht. 1996. The exclamative sentence type in English. In Goldberg, A. E., ed., Conceptual structure, discourse and language, 375-389. Stanford: Center for the Study of Language and Information Publications.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. A comprehensive grammar of the English language. London: Longman.
Sperber, D. and D. Wilson. 1986. Relevance: communication and cognition. Oxford: Blackwell.
吉村あき子 1998.『否定極性現象』東京：英宝社。
Wierzbicka, A. 1991. Cross-cultural pragmatics: the semantics of human interaction. Berlin: Mouton De Gruyter.